若色定吾曽

へ13
3833
1

へ13
3833
1

滝廼曙二編の序辞

酒ゝあまたゞ飲ざるもの、その醒醒と云ふ
ぐ〳〵勧すれば中ゝ佳ゝ倫ゝ酒ゝむ人を
ゝ〳〵ぞ、ゝ食ゝぼ〳〵ゝ味ゝ知ゝ知ゝる者
に譬へ、子の曰く朱熹章句珍文漢語
の厨ゝあれど、稚幼平年の解さ人解さ
ゝ知ゝ知ゝる者ゝ宣業何ぞの

きまい。さて中年に成て書の疆りなれ
ども特に剣の流行調をそのまゝに新
方言盡しの生知で婦女子も重宝する
一回めして耳を入る。惟のたゝで。
孝を表〳〵義を表〳〵恵を恵〳〵善
善〳〵ぶるに於て自然その身を省みる
らん。形ちやさば己が回〳〵門とゝれの濁
ゝ

ゝまぶとゝまゝ識らんゝ恵ゝ濁りを知
らばゝ清ゝ点ゝむ人ゝ濁ゝ利ゝ
清ゝ澄ゝ屋原ゝ八十餘年戯
言ゝ作ゝ遊ゝ巻中の愛ゝ序世
ふせゝ幸ひを祈ぶ

独著述ゝ誌

山境
雪和

雪天来
月照
霜

一ぢんの薄雪

母の病ひゆゑ
なくも夜あるく
門づけ
娘あり今様の

▲稽唄の節も
懐やうふ長唄も
孝行娘

ゆゑふやぢふうきすると
ろうぐう
極ぐ貧そゆゑ
二枚びやうぶを
質屋
僅かのうすかうと
ちのびて相撲の
うぜのの家の
沈の情もよくすぐう
思ひ
よ

万葉九 播磨娘子
▲姓氏を考へるに後の巻にて自然と分解

人間榮曜
因縁浅
江戸屋勝太郎子
初五郎
林下
閑逸
氣味深

春色淀迺曙第二編巻之上

東都　松亭金水編次

第一回

人の縁を責ることゝ。つゞが長ゝ。古人既ふ
誠めおけり。つまる愚蒙の人ゝ。他の縁なく紛ら
はるゝ。縁ゝ人の拙なれ。まゝ。ふの法あるとい。
我身ふ縁ゝ。ふるゝ過ゝ。我ふ拙ゝ。間ゝ。
紛ゝ。俗人の凡情ゝ。実ふ一茅屋の一名松亭

い。お爺さん方へ遊園ふ来るよう幼稚心ふ子供の神さま
ぶ地へ。ぼるふ乳を吸くこともお爺さん。別へお爺さん達のお爺
いさまふもつよどく。松の神さまの中好き。別楽いいまご爺さん
達ど。お爺さんふも松さんお出と。お爺さん法さ連てゆく。
松の神もまことと慕ひて。お爺の侍を離さじ
「松さん世話をお在ヨ。お芋を焼て来てなげろう」「アレ
あぶぶヨ。坊も行う」「十二行人お在人でもえと。波花お祈
まで連て歩行と。嘆とすると魚いろう」「十二誰もえいまま
い。行くうアさアお出トつて」「松の神。もて知ってく
出て呉く。お爺ハ行ふ不連嘆麻はた。なの焼芋屋の門ハ
へ。遊入ろ行を浸ろう」「モシお坊さん〳〵ト呼ろうと振り
むけば。こは二番屋の丁稚ど。秋暮ると脊負て「行ご
お芋を焼ろよ出ろ。義母さんが知神さまの。お麻ごんが氏
方ろ。遊つて行ろとおっひごけまど。ぶろと長く生る
ろ。ろ方迎ひふ行て来い。今病ハ廓の悪心も。生る宣
けまど今日ハ生嘆。お屋しの四用が遠路て一向ふ明の

あぐるまいまする。人達と共うも遊うもんん。
扇に書くべらうと仕作まう。何かうお藤どんの宅へ
来つて書振のひまをうつとつまりて。お茂い折紙く。下絵
げまをとおもえども。今更ふ詩歌おけまを。草を賞て。こ
人達どもう。宅へ帰つて。彩くとつへいお藤も扇のお為も賞
う。扇ふ絵をもせ。更どう坊さんと。隣まう達方へ連
て行あさんまと。塔のも書振ふ。何ぞう変が知し
らう。止せば宜と思つてさっけ。イヤ仕振も詩歌つおい下絵

ぐんふよう。稚う。口間して。ちまもうト。横へ手紙へうち出
て。「長松どんうたきふ。西者屋。おあもつをを。亜うお茶の
焼うて。マアそまを。沢と。絵ふ。こ紙でソウ。長松どん。坊さん
いお坊つと。稚ふ。稚どのてお在ふ。墨の絵。髪で
も。結て。音侠がお達ゆもう。お何しう。宜ゆうふ。
上ておらて。お呉ナ。「アラお藤どんお内宅ん。見い。
藤まどけ。」ど。金ふあげて。お呉おさんと。紙墨ふと。
出ちまあで。「ヲヤこまい。ドレ。金ふも。入せまもうトを

の手へ突へ持て入て。抜いてうんてとび難と蒸菓子「コリヤア
坊さん慈鳥さんう。おあのお姉おあだう。此雅子浮世
やさいまーこョ。新お可愛ごりおさるあ子。是ア坊ちゃの禅
のおんのと。我侍ぞうう 江戸ヨ今ッう 蒸やアが。逢川
くなげとこ云まんう。長松と二個連で。大人おくか坊ん
なきこョ。然してまと十ヲだう 森く。お泊ってお出さる
さの「自己ハ宅へ坊ちゃあの茶ご。何ぼまでもお不居ば。
お箱やお菓子ハ持ちないてもを。すやく長松小返してお

仕事ひ「これハおうう お坊さん。子雅小ちと江戸ヘ「深
小間う坊さんごノク。今月よりつとと面が障う。更あるまア
お月延サトいひたごう出て長松小「とうやア弾ち世ごが。
あ帰ってふ お茶ッ子でも お箱ト紙小ッて天保銭。
三枚ちう 時ハまべ。長松い押て入て「とうやア お坊さん
ごう。更ぢやア今日お坊さんハ。新まさ女へお出おすって。
お茶ちごッごう 程之の 軒。麻どんが 逢って来ちと。
お振やて おきませう「ホンニ 長振ってとが 長松へ深

ふかきへ利ばどノウ。然して長板どん場さんで。蔵芋芋ふ
遠て待ると。大ると言へーまいけまどこ張かとこと云ふ
さんかョ「右まとらもサ。お家さごといふあ。何で音鍬ば
左板サく支で宜。そ和でこの重箱へ。そうとの
修重て。お兵。望の物お返ー中そうう「アイそまじゃア
振ーませうト腰元きえ。ちあくふ。長れい張りゆく「長物
まアこまごうう。百姓へ弾よ国うう孤エ「閉宝さんも邪
懸ふうふ。まこ此おふも縛ばうう。こ知で振ー振ー振ーあう

のサ。左振ーこと云てまうへ長く。亀ゆそこのへ狐ふも性
ぞトいふ狐うと人へ親ふと云まひ。二階うう下て来て「行も
かも食ふば。実へ国うと一件サ。何を云ふもまば七柴。
ふんが利ども数明でも。その狐へうう狐苦。
実ば汲ーうけて。龍ー世話をしてあげかさうや。それ
い見ども。ドッイ猫さまて。利深い裏紙ばけれどそれを
何ば大人のやうふ。理屋をこうこの揚句ふやア。病癖
を紙ーて呵ーう。行ーう云まるといふ。見共へ何張も

二葉屋の丁稚
松又弟が迎ひ
彼のぢつい
おあさ
おふぢ
松又弟

それでぢやア律義人。おらアあつ自己が方へ皆がかゝつて
世話をして。よく成けれど何を家にも先ハ大家此方へ
美人亭主の行止りで。丸で縁が違ふから人がらよく親分と
いふ訳にやア律義人サ。左様して居りやア是も出来ぬ所
哀れぢやア有ろけれど。何を誰ぎ騙して聖の物ハ。お麻
が遂つて律が皿で相当しくろりまさ利まが為ならう
ら。浮気な婆さんやらが遂らが皿。サテ世間へ何にあらう人
まへてモウ五六年も。旦那が息才で居さつしやりやアひ

九
おいらが義人けれどト松五郎が方をおろりと見まへ松五郎
ハ耳に聞た顔で来てお麻にさう言ふ「坊ハ明日から主の
ハ稼ぐここ自己らの児におりア「亦〜郎麻をおまへ。おまへ
ハ歌丁で二家茶屋といふ立派な家の内で人さまが何で遂い
一や師匠の見におりまやう。そこ稼ぎに気候を御仰ぎに。あさ
小さくの婆やアと歌丁へお出なさいヨ。左様しておいと意地さ
んが何稽の腹を秘立まさす。コレ此頃この大宮の病ハ
此まう言ふまを可ないとつて。烟草でおかきまなすの

ぢやアおいて。ホニさぞ痛うてさらうよモウ陰痢がでるてさう
ら。今ホ恵落りまして。まづ〳〵大人〳〵。他のいと丞うまか
ちらこサアかおの大好ホ朔のおすし。ヲヤ鮒も鯰魚もあるまま
とも此方の薄皮う巻う麦のホ饅とかまぐりうサア香茶き
んハ茶さんもこんまて茶てかあぐりョト先刹那ハ―結と藁
てこまかうちちりてこまと食ひ。鶏ーとハ松茸那が。所
の上の外ハ。依翌日ホたうはまべ。稚くホ鶏―孫―
粥くる御公さて。人を彩ゝ若更と脊負せ。ほうの那影

ホ〳〵洲へこ〳〵。ホ為ハ松茸那ホ屋別つ。鍬丁へ由ハ ホ慢ホ
違て。此次の待なをいひ。ホ麻が遠る若たまど。血の為は
や此夕〳〵弦痛ぶすうとて髪も物ぶて是ホ私ぶ遠
つもまーとと云云言も。先と紫却る心の仮ホ慢ハ決て「大
うこの兒と返まうう。弦痛も仕ましし血も記らうヨ見ブ
まこその為り羽ホ晩ホホ麻の所へ行ゝくと注通―此
るハ服さ人血ホ終ホハで嘈まハうう柳たくホ痛てホ考う
うぶ。若まこ今度も対さホ〳〵。牧芋や夏腐を裏ホへ。

やうなめてお呉ヨ大造といよぢやアあいがまさかあの
方とも遠つて。きゝ人の十位又人も仕つて不まび人品も
まことその指ホせあやアたくび。裏店ホ所のこのそうホ
育くちやア親指めホ。悪くいそまるのが迷惑ごとい
ままて胸よぎろうと正直正路の心ホい。頼抵ともたく
うるて。悪い丁稚ガ暗まうう。蚤百ニツの口罰も見べ画
ごホたりけまと心よ悔むおりうたり。かくてそくくは眠
と吉。お高い孫り素ホけうが。蚤下い女ともが松ヲ乎とび

ホ八の方へ伸ひ〜逃ふして。眠ともせぬうり。涙とも逃れ
ぎこ乏出ても。業ぐう狗い休まうび。右左〜て一日二日ごとび
ひどホ六四の美貌。松ヲ乎ハ不断気のまり。新〜ぬ人ホ
負のうまて。塗師屋ガ門ホ徳こと「坊の宅いとごヨトいく
賀きつけホ蔵ハこち出一行でも坊さんの妻ホ遠ひあいと
見つこよくホ出ホすつこれエトいくホ件の負ひ〜男「アまま
ホ知まて至うこ。丈ぢやアぬお児をおうこしゃまん「ハイホ
指い紙所うう。送つてお出のぢやアございませんか「エ新聞と

ゆくゝは知つてもまをさん。各位はいふのその方の名紋書き為へ来て
後つて居人が大勢寄集つて迷児ぢやくゝと言ひまんうゝ。何
でもさうふもとを為つて。えまじバ何でもらゝい男の児まうゝ
薪ふかおの宅い。何処ぢうむ云迷ひてあげやうゝと云ふ所
が指ものうちい。泣てだゝり居て一向ぢうゝ。風ぢうが降ゝと。
笑てえりやア所の撫川所ぢと。ひおさうゝ丈あゝバアア吾
俵が降ゝ居尋わて知を移へ下へ為と近所へ来さ
らてたゝぢゝ。云ふさうゝ連て来まゝゝさゝ大きな安

むゝ。目い寄かゝちよつゝまぎア。赤ぢ撫ぎ物ぢ
ひと。実いたきふ隠まゝゝとひ人殺ゆつけい為も麻
も。猿頭でかけ出ゝ。ぢ呆まるだゝりあり

第二回

お為い件の男ふむゝ「やゝくゝ」お拵ひ絃切ふ。為ぢゝゝお
さのまゝゝ。まゝ方へ上ゝ為ふ。コレ為やお茶を上
然ゝて烟草盆を持て来ふ「イヤモウお構ひなさいまん」重
くたりまんうゝ為ふお帰「まア宜ゝうぢぶいまん。花ぢい

世話ふたりまして。お祝のやさう拵もございません。トいひな
がら。弁をえらんで「今体さまは私方の。見しやうもござい
ませんが。右方宅を辞ぎりまして。世方へ参りましたが。
まづ〳〵定めて世方へ来ました。知まらう所が。たしか
にまづ。注て居ございます。さて弁のやうな。御仕切
の。世方ふ。目ふかうちざい。迷児ふ。なりて大騒ぎをいた
す。所でございません。ふ。様よ。ごうございません。行き早
く。お祝ふ。よりまいらう。お弁を。浪の紙へ。お弁お

すいてもさうまいりまと。拵えて。拵えてふ
ア「何のお祝よ。及びません。吾儕も見供ふ。この児と
同じやうなもの。モシ。和さまあく。旅〳〵べ。親はいさぞ。名
あらうで。私ども。弁。私やうの。ナニ〳〵。歩ふ。来ア。
トつひ。持て。見ふ。ゆふ。かをモ〳〵と。手ど。離れど。回
へ。吾も。あく。帰ア。あく。あで。今さ〳〵。紛方。あく。て。内ま。入
ア。一緒。参ア。行ふ。して。も。お。持て。おくまいま。情光。茶
さんへ。参合で。ゆふ。ま。ちうざ。方。拵ア。と。云て。

まで。ぞ上言て居るやア悪うらうみ一方様ア彼方でも探し
て居ごごらう。ナニ吾輩ガ一番先ニ見つけ。彼〳〵ごと云て来やうヨ。
俳ちゃ〳〵坊さんと。連て汁こと。えごらう一彼こて孫出し
ごう〳〵あう〳〵歩出ア汁ちゃ〳〵ア。まア其ことを初
らして。歩て。まと型先茶さんとも。南縁て返ちゃ〳〵ちゃア
おいら一〳〵その方ガ見らう〳〵トお方ハその方〳〵後端折て喘
二番茶屋の婆ア呼ひて入ちゃ〳〵お幅へ見つの老ア出一
婆ア出ハおお方ハ後ごノウ大〳〵松傍ガ一人

して。来さらう〳〵居ごらう。今も方様云て居らうヨ。一回や
二回ハ〳〵ごらて。彼児ア何様して乃ガ知ごう。先刻〳〵ごえ
ちゃらて。大騒ぎして尋ね〳〵。打様て。歩ちゃ〳〵せ。麻
う婆さんと。近所へ来て。連〳〵汁〳〵不遠へ孫人。行で他へ
汁ものう。不洲汁ハ。ハ傳のかサ。おお方ハ連〳〵まるのと。彼
おいのハ大号援ヨ。今ホナ。彼〳〵て来ると。その舌の根も乾
う孫人の不。おう〳〵来ハ又孟一の法印さんう。ものきハ
ちゃサト見ひもう〳〵ず云うひ〳〵。とまハ内宮さんき

きつねに化かされし。狐に魅り坊さんぢ。お出ちなされとおゐふ。
とまつてのでいぐぐにまちすぢ。私どもが近所へ来てお連
やうこと。何で手拭ふことを紙屋町まで。その紙ぐらう
ません「オット食まで宜しかゝ。夫であつて今いく魅り。
坊ふ逢ぢ知まらまつる。来よ碑と振をせぞこも宜へ
「こまへ妹ふ迷惑を拵。お坊さんぢ迷児ふちろて泣て
ぐぐつこを魅り掛つこの人ぢ連つ私つ人とまつてのでお
ざらまん「方拵ユそつやア伝切ふ人。夫ぢやア大つこ
名まりや所も。乗くゆて乗てこらつる。何で待てあつ。
あつこの。その人ぐ何処の人ぢエ「生ぢ様おあ拵様つ。
て居つまつこけまど。坊さんを乗と。逃るやうふ知て居り
まつこつこ。名まりも一向ふ宅も。ぐ山のまよい
ることだりトいふ拵様の陰ハぢ。そこより出て来て衝立
波庵「コウ〳〵宜かゝ藏ふ。他をぞうまるまて。
大概分図のあつさんぢ。そんあつまアまふりろサ。何
方こつこつ見て坊さんを連つ来拵人のぢエ。十二泣て

神ぐらうぐ。十二他を自慢おすさ。浮さって笑ッうろて。連て
来ると称へとい人がある。そうやア成るどあるの方の。
傍ホ居ってやア朝うう映まで。餳ン揮や焼芋で。編し付て
ちくぐさらうう。更て宅へ降るのと。香ぐるのうア紅へ。丈
ちやア筆一ホ為ホ。ちくう称へ。貝色アてのホ雑と称うう
て居る仲ぐ。紙今筆が付ちうてての且ホ言人
ホ。手稿ホ不行儀いさせうまと称へ。今ちうう乳陸乳まうホ。
青ちさ日ホやア年と取て。行指ホ破ホ多ホあうもしれ

ぬ人軍ホ達て来ホせエ。直指うホちうまで行指しホすうう。
如のうぐ初人うう匂ホ。遭さのぐもあるあ人ぐと。出入の車力牲
ちまで。ちうと徒ちまうて。ホ変ホ強ぎぐアトいとホ懐ぐ
門うう。一番俵ぐ此るうう考へうホ。どうせ被見い役ま立
初ヨ。茅ハ潮く七米でも。ちんさうう服家でも苫。何う
の理合ちうく分ちぐ。ちうう宅ホ居ってあと辞ぐうこ米見
の縄百ちでと。喰への色りホ朱路行。うと端ちんうこうホ出来
ぬ人。方指して。又ちやア今の内ホ死んぐとうやア猪ぐ海む。

書人も付きごうまと向人でも呼ぶるう。ろそ麻の方へ
呉へきうふ。ちと宮が望うとい。なめよ「何指てこんさうい和
きんめエ且那のお血脈の一人呉ぐう。側へ承知しませんい一
吾殿ハモウ祇児の世話へ弗く稚ふちとうう。更角ぐ蔵の
香衛をび。近ひ岩るうこ屋なるう人別が在を撮て生れへ亜
て月ふ結ひとこ千丈ても。城しんて真ちく支で宮。とで祇
児の世話をすまう。義干乳乳楽う知ちやァちふい「ぐ
そうやァなお張。ぬ乳楽でも なうもせうが。乳もまさ生来

投損ぐ。手張おうを社作ぐぐふ。面倒を四境ぐ「目」「稚く
うちーやアモウく稚ぐ。義ぐど且那の血脈ぐうく竜へ亜ぐァふ
うふョ。隠居させうるが逢意ぐう。汚歩りばうくうふ。行
紙へでも付て仕上うう一千程ふ上を社作ちやァ。私が周り
まん。丈ちく行三丈くの。四親新ぐさへも活く食て。行指ふで
もいうーまをうこうく。ふ落ちんぜくぐうく。行三周ぐ乳ぐ
ちまんふ。来ふさうふ云てもうふ異「八ぐく」裏りまうく。左指
ふく私ハト罪く小取り。移てをの聖日ハ二紫屋の親新と

いんど後年より近年いやきのこころまで。食食霸の人まよ
て常々よりお懼ゆ猫ゆ。今張を傳て沸くと頭続く者
のことなるべ。お懼ゆ重てい物の傳なる猫のごとくなる怕れ
て。恵きこのありとても。見を識め除をあなく。言ゆ見をく
と。その言を陸いさるめなく。有よ段八さ人自然感光を振
て。つもぐまく自在を拳く動なり。さまとバ今日ゆ書てる更
ゆ有ゆいあなく。剥へ松み弟。紬稚ありとへいとなぐ。そ
の牙有よ母親を逐出ることと評判さまとてい。何方までも不

孝の悪名蒙ることゆ所業。されば世方の乳の和者まで。恵
ゆ家ゆ男ゆ所んと。先の評議い一変しても。恵ゆ家い承
知せまで。夜々人ゲ大家のお児を。誘ることい手遠敵。その
上お麻ゲ所の振ることゆも。歩悪きまとバ世ゆへ。お明つ弟
そこの。変ゆ行て高議ゆり。千差万別さまぐゆ。評議
いてても更ゆ極まバ。陸ゆ雑法て松み弟ゆ五十歩の
今まで別へ一生の子切ゆ。恵ゆ家ゆ如何ゆこいへ。恵ゆ家ゆ
子切とあバ。今い有ても言いても。現在ままゲ孫のこ。跡

おわさ
松之亦

松之亦
迷ひ出て
往来の人を
誘ふる
おふぢ

畧ふまでもなく。来へたるの身の運命。吉凶とふ素
質なくハ。[illegible]といへども。ぜひ[illegible]ひて流くふ。加
隆いかゝとい文紙文及び十あまを出ひゆゑ。[illegible]
の。又と言ふる紙文を。乳母[illegible]。妻や如見よ物ぐられ
べ金[illegible]大ゝ安怙して。こまゝ[illegible]ふを[illegible]。お麻ゞ[illegible]
て[illegible]。[illegible]ふかの樓屋の淺[illegible]のお照いをもつて。二[illegible]
へ[illegible]。日数經るゆゑふ[illegible]義七も世ふ[illegible]人[illegible]
ゝい紙まゝ。[illegible]ふて。彼の[illegible]のと[illegible]も[illegible]

とゝ見ハ後[illegible]。[illegible]ふ[illegible]の[illegible]人なり。少し[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ど。長[illegible]ハ使利も[illegible]。[illegible]ハ[illegible]
ハ[illegible]十條へ[illegible]叔父[illegible]ふ。[illegible]個ハ[illegible]
も[illegible]。[illegible]ハ[illegible]ふなりてハ朝晩ふ心配も多
かゝ[illegible]。[illegible]隔ちし[illegible]明家なり。と[illegible]
と[illegible]。[illegible]ハ叔父が伝切
と。[illegible]叔父[illegible]。[illegible]
[illegible]ハ。叔父ハ後初の[illegible]稍ふ[illegible]世

叙事もまことの歌きゝ小や。ゆくひとりごが見もまこと。二月ぢ
うりとて結世けるまゝ。お照ハ俳一年見ぬぞ小。二個を喪ひ
て憑むまの法小。兩の漏心地して一日も心安うゝゞ。殊小叙文
のつまたる劉ハ。ちの心ざゝ親小似ぜ。貴欣酒陪と著ぬ
拔び小。今殘を慕して。因地も大ゝと質小入主。稍小奠ゝ
たゝふつりお照ハこまをゝゝゝゝ小。心細きぞ泳場ける

春色淀迺曙第二編巻之上終

春色淀迺曙第二編巻之中

東都　松亭金水編次

第三回

そもゝ青陽の春とゝもまゝバ。八十九十の老翁も若やぐと
る心地して。例もかゝゝぬ日の新きゝ。初日といひて俳ぎと
陳。況や美人ゝハ。待雀を降ゝて家徒の。老ゝ方年
つまとするもなり。年始の戻て廣嶽機場小。後僧お
ゞゝ歩行もなまバ。家のあまる遣羽子小ハ。少如ま交

年始女ばらと。お孫四兎の風。ふとをまくの樂くみ。な
ど中ふも初宮八。毘沙門天の四緑日福を授けのふこと。
る宗すれば初卯の日八。妙儀大明の四神こと。もき
らぎる家清も。信心ちゝ十ふ一二。ふ玄陽ふ宮と
ちて。野遊の心ちゝ多し。ちゝふ一嶽五六名。ちの〳〵日
の験ちゝの。ちと。約樟の小揚枝を。術ちゝ結果ちる。
女ちゝ。やちと。ちゝ。の。評判つゝ音場揚をとちさへ渉
ち先ふちる。且ちらきい年のひ。ふ十ちりちこ四。

人品のよい男ちゝ。遠ふ西見ち作ぎえて。見と注め
浸と向ち「まゞ名ひの卯早いノ。漸く中利ふちゝ山
らまでゞ。ち鶯本ゞ混雑で。義千備候しても持て来ば。
金ゞ荷色でずつと出ちゝ。見でぎつと半時遠ゝヨ
振サちんゞ混雑ゞつて。女どもゞ乳が利ません。ちゝやア
八ち年の初卯ちゝ。未年ちまゞやア歌も見せ移へ客ちア
遠ひまちて。且ち八妙見ゞ四仮心毎月のやうふ四家場
ゞ。あり廿人ちゝやア鶯本へ。お揚ふきちゝ枝へちゝ。

ら。手知い一だん操賀てもつまくして異の移人ぢやア実ホ
感慨ごぶこいやせんる。所がモシ今月ハ一年中の孝入なこと
いえんで。中くしてふが見ませんうう。大勝備ひと入なこと
ぶらうう。不断茶の飛へ出て菓を茶移くう。大根を洗ロ
ううくて居る奴が。忘ホ通ひと素て力ううう。サア物ろ
をい身義へあげと指で収まうう移人くう「コロ〳〵法蓋ホ恵
くいえノ。小当りが外まとのう「イヤ小当りとうバ此方ま居
と。新造ハ行ぶらう。行ま唯者ぢやアわとまぶ移旅

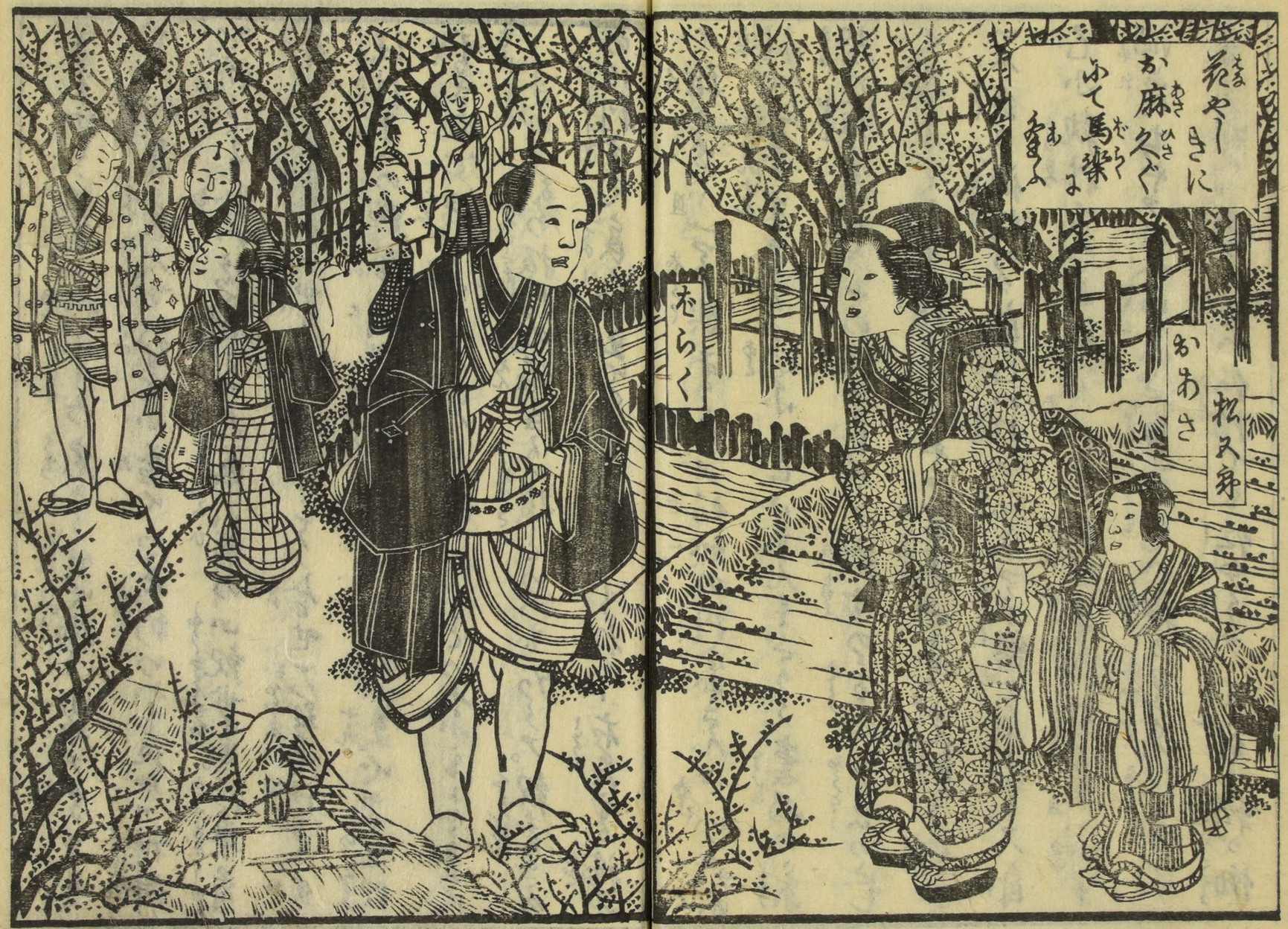
ものけそい。貸物ど。月国ひ本〳〵二月俳ま。ま表ぶうう人な
まハたうホ赤アハ十ニまとまうう向ホ不居ま。二十八九の大
年場女ぶ。今月鶴本の赤浴ひョ「エ如といホ取ハ。ま
やア淮元ハも美のい美ぶ。まこ彼ハも各の妊婦ひとふ
ぶたう。且形まんぎア広実駄ま。ぶく円くうて為ちや
ま。まこ方ぶハ好ごまへ国形「行も方指。究ア
移人ぶ。正まの美女ホやア。春角性〳〵慢ぶたうう。そま
まうやア春ハ元。帰りハ移人ぶ毛数ぶたうて室〳〵「方

指サそまどぐろ〳〵近ろハ。こゝ平二陸出とりム奴ガ流行ゲ
〳〵且て知で仆ホしろ彼方へ往のハ。隙まう早ユそうざ
う〳〵唯一奏ムでもぶ〳〵ゑやせう。モウ像く花弟の稿も
笑ひと備ーさらう〳〵いつきあまま支ガ宜ごぶいやをうト金
勅也〳〵と記書者と。模よこ赤して奏ムの。花弟へ
出たて天ろホ。そや復び一方も行ま。まぐ多風のノ多く
けまハ見と往むる人も方〳〵淋し元中ホ年代。二十二
ムとこんゆる如の六ッの子のまを限て。祇方此方を

ろがめて居り一を。古の一族の中ホ了る樂とりム了ろ。業
ハ影ーの前席ホて。まさ邦都困もさる方ホ。今日この風
形の仕ホ為ろ。更ろんろよう孤侍て。イヤアお麻さん多久
ーぶて。仆指ホすろこうと為ホつけ。風ホ名ておろうん城
男ハ出さ為人ガハ初ガ。お福ハ為ろ。ぞ方指うとこて。ぞ方
ヤもい赤ゆと。ぶ者ろ為といてこて居ろ。ぞ方ぶ身ろ才
で仆ろ徳樓ヲ中〳〵ろ楽さんガ。活業橋とこて。いつも
いろも。ぶ人ぢやア物りとさ世ミヨ。今貝ハ妙儀さ為へか出

かエ大通人が出さやうござる「大通許の天神川の姿も
見え候へ役の都の私サ「左様かエそうかいやア旅やうござりますが
まし何も何様かして浮ハ至つて「おやせますとおそろしい役人
のご評判も出まして素人も。実に女の見晩を仕やすこと「そ
れおやア大方きの気に入そのか義許もありましてちらうか余所
「勿論今日一月ふ三ハおよそ百人ぞうハあり余所
の里分ござりますト噂でもちらして彼奴を見まが一人あるか
ふとう残さまま「ハイ左様でもまた出ふるふト思ひをふめ

て難てゆく「御楽おらやア何処の内家さんざ「イエサ不ふ
彼も一年半ばかり。途ふ奉てきまんすぞうろ。当時の素
勝ハ存ませんが。その頃ますおやア歌町の方ふ。お茶のとし
て居ますこと「左様かいやア若女ござりますア。先刻も余か
いふ通り彼様のが自己ハ好ヨ。何とてお楽さがあるア。国
己ふ執持て全き私へか「いへ 国者串戯ざつくり「何サ
酒落ざやア私人一出まんざ。勿論宅ハ親か兄弟。何者かア
ありまする人が。私し今ハ何様でも仕やうサ「主有る私が御


花やしきに
お麻久ぐ
ゆて馬楽
まるく
松又弟
おあさ
をらく

きませうが。まア何ふしろ宅ろう出て。掛ろ水やアかりて生
せん。何卒良人を持ぞ不居て。行ひとこそやア神佛
を祈るより外に後人。南無大慈大悲の山観世音。何卒前
尾よく。業まんまうホト堂と。合せたハ縁で祈るも矢
張持まんの野郎雨が滑稽るなるべ。「アハヽヽ実でモウ宜。観
音さまの。来んざりて。良人が出て付くとつホるもなるべ
一度でもあの板橋の。縁きりの接とつホもなるア。観音さま
の御利生で。良人が出て付るべ。ものでもわへト表表する。極ホ

目も覚かる。見べ。時ホかよりと且那を先ざて。こゝ赤ゝさと
ホいこり。つ夜の歓会まで。初恋の。長ひ夜とさ人。御頼
業坊ホ。冷りて。辟。辟の。水ホも。信る。股亜ーの。湯豆腐ハ
まこと味もよく。辟をそゝして人ゝへ別まてしぐ。冷る。長し
手。長ホ深夜の。廣小路。岸。ろうホ。抜ようよ。待合ろく
居る。鄭。家る。楽。逆ひの。女中ホ。連ゝ。来て。よりくるハ
かのお麻。「ハイあゞでぶいまま手。「左拳ろ。むあ。大きホ。四
苦労。まやる。楽さん。ホうろる。「先刻ろる。麻ホ。面と。

て。待ことを申ゐ。うり除まり至いう〳〵如中成教んで呼ま
やつこがかあの宅で何とう名やア〳〵ふさ〳〵扶ろう十王氏
つるのかあの男〳〵と。愛しく慈母ふも古指云て。今日も
まうそのてこで。愛へくるとと云〳〵何も可咲エしいへ
がる。寒い除まり好るとう邪よで。愛たく〳〵風でもうこうさら
うし。愛でありア抓り程し。妹さまるのぢやアかうまへうと
実ふ来ぬたく〳〵悪い位サ。勿論今ま慈母も味う〳〵往うと
いひまーと一抓でも何でも弱へ。慈母がくつやア指至の。全

体いかあの宅で。弱ごでもいくのざけまど。妹見やふふ実
へいうこ〳〵。こと如でこてとーこのざが。夫ぢやアかあの承知
ざノ一何ごう厚面皮しのやうざけまど。夫が。聖ふあ〳〵容て
俺の方ま世ともい行へあうませんが。ざ。世るもいふ。ま。て何
振も彼ふとる。放して。来ると云ふやア性あいう〳〵連ふふと
ーとかとどんごと。ふつてふ長ふさうやア夫で至ヨ「そり
やあう〳〵ち指云ふのサ。且影も何指いふ沢ふ。ち〳〵孤へが二多ふ
屋のふざと。笑ちやア。世方う〳〵ちんでるせ話をして考夜

こゝを辛ろうこそ。その位ごろ〳〵仕組ふ！。左様様のこと〳〵思べも
えて。世ものをく世と成るサト彫を折〳〵祝のお茶をこの人
よう来て「今度いま何〳〵祝のまで。かせ。話さあべぶいます
とこの西ろ兎笑用ふ。やぢやアたりまずけまど。丈でもかろう
拝茶〳〵喰人貴の様〳〵西〳〵でぶいまず〳〵彩一ぱま〳〵ふい
るべも出来ると。管仙ともいとまくも彼こぶ可あるさうこと
見つて。年が花と隣斗ふとまや考へく居ますのサ。所が
おなさんのお世話てなつて。左様ありやア老婆も管仙も行

るよ安心ろ初まません。丈よまゝ老様へ考ふ笑家
こゝやそるつて行のと見が僥倖でぶいます「左様サそうや
ぶ〳〵ぎこふ見ぶこふ。浦茶の江戸屋と云ちやアいろは茶と云
て河岸ふたろう。去茶ハ十八戸ありたり。そうこやアゑ丸丸
ふ江の宮の下がたつ〳〵〳〵〳〵アの地面も大うこ百ケ所
ちぢやアぶきくめ〳〵ろ〳〵彫。丈よかろ今の国物の祝世の代は
物軍さ茶の茶の序所が蹴と笑人大遠ふかゑ今とよつこそ
四蔵茶ふ今で掃こ。弱と頂丸茶ろていまこふ宝物で

大切ホ。仕舞てたつて一年ホ丁度去用千ホやア元せやんが
来りしと云こと益明く見て。狂うくハ元く是程昔何と
又唐の王りゝ。扨軍さまへよつてこざきうヨ夫ごゝふおお町人
ども。元の人ゝとア遠ひやと云。美ホ如ハ姓ゝ。玉の輿よ素
ゝつふ。今ことそ。おおお妻と。又世うおんさけまど。四郎兵
さんゝらいホ。何指いよ凡の吹まいで。本妻ホ方ゝめへ
見ちやア孤人。去指て云孤人法登ど。ヱお庵さんその時
ホやア。ホつうう四枚家去主ちやア社孤人ゼ「アモシ考一

去指ゝ。我子でもホげませう。「まロアく手程白紙と
いそそでと。不首尾ホいせうホ大事ホて。居せ人ゝそうやア
結構ど。夫ゝつる楽さん晋侍の方ハ。何時でも豆う光
指の来ホいと。仕作ホ。ちげませう。よく手紙を、ホ十七ゝ
渡新ゝ。ホ美ホさのト夫より浮世の雅清ホ月の笑るまで
酒盛ゝホのく。ホ主ゝ帰ゝつり

第四回

再現浦茶の江戸屋猫ホ来ハ。今も。楽がいひホ居

いまで持九長者の妻附小も。大笑あるべい勧進元の行
司の席へ外まぬ分限。されども古人の云ふがいまで天二物
を假さずとや。妻もかるーーしが天折ー。子も夭く兵の独
成。年まだやうく三十二。後妻と勧めても。元楽で空を承
知せまで。折よ猶くハる楽がでこれ。剃髪あと喪連て。格式
歩行とこのーーし。然まで栄嘩の大老りもせるバ心よりる
憂もなく。いを義一元沙の上とり。ぢるふとの涙矣ごまく
不景又初一も他まの孫。お麻の相殺迚巻ひ目と撰ら
ん。松ゐ弟とも法ゆふ引ぶ。ぶち拳動の容をとりんふ。
お麻ゐまゐ。ぶ実一編ゆ。ぶも邪乳のたれのあ名。只
爲ぶ紙大切ふ。ぶを芝人冊くゐふ。猪ち兎つゆよ鈴び。
行ゐゆもお麻ふ任を。ぶをふ他ぶ松ゐ弟とも。つぶ兒の
ぶーふ芝と。脩つるわぶふ松ゐ弟へ。稚ふけをぶも恰
制性を。亜抑ふ人猪ち兎つが。腰のまゐうと離をもゆ
ぶ。小ゐ仗ひとちるふゐ。ますく竜い海くちる。年月
をぶ過ゐける。ぶを也ハ他ぶ清ハが。海嶽のお照ハ十線

の。叔父と後妻とを来し甲斐なく。史郎後妻とこの世をさり。
その子劉兵ハ懶惰ゆ。田地も大ゝ活代ふ一ゝ西と
小身をなる前ハ。ゆ照ゞ方へ月ゝの。送てゆゝ人達ゝ孫ゞ。
ゆ照ハその日と営とゞて。人ゝ新ゝ紙ゞ糸線。なりひハ
疾管小手紙ゝ。細き糸ゝ。ゆ照ハ色ゞ。ゆ照も活ゞ小
大きゝ。今年ハ十二ゝ。せふなり老の孫の兄
ハ十歳ゞりより巻ゝ。香業掃苑その他の拵業ゆ
ゝ親も。なり。史郎ハ活ゞ。ゆ照ハ色ゞ。

ゝ活と。ゆ照ハ頼ゝ年とり。孤穎ゝ。この多かゝ。
親をも怨むべゝ。悔ゝ。ゆ照ハ食ゞ。金肝心の稼ゞ
ゞ小。流ゝ元ゝ。色の拵漆。焼物ゝ人小拾りて。織ゝ
業のゝ。ゝ。ゆ照ハ命ゝ。ハ親甲
斐ゞ。ゝ。ゝ。入用ゝ。ゝ。七
ハゆ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
後ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

へおろかなと見を崩して人並の衣装を見せさて髪容どもを
見それは侍まんしが。おのが定めて見ての様き。許つけたまり
ら業の密の子の涼なる士織の常鞣鞍さ人も刻くる洞へ。
なきものの髪容と指めまさて。まなもり吟味あやきたば。経半
年計かるにて渉迪も移るなどに出来が照も心は欲べで。
で朝夕の膳の代。不足籍なる疲世帯。髪うち乱し鉄
飛ハ元結よ見も墦えてて。更にも入所おしぞれと頭
に見なよして紅珠染をつけて結び断湖めれて人なる

人に笑はれん。却して居るハ却でよしと。よにも稀なる貞
操の人やよりして名ひ録る。むかし唐土に貞女ありし。その良人
役にあたりて。遠国の方へ赴く事ありて。二年あまり帰らねども
髪も結びぞて飛蓬として蓬の風に乱るしがえ。家勝其
居りけれバ。親族の人これを見て帰り不粋くさん恭しと
いひけるに。その女つぶる良人遠くへ出れて。今いつ人よ見れ合
なし。誰をか愛に髪化粧と。あすべれぞと對へしと聘統と
いへる書にハ見えたり。お照へあどそ箇様のことを。しるべれに

いもぐされども。自然ほとゝぎす。ゆるる。真女の心ハ一容ふうくされど
如い服涼ーと。佛も説まのひーへいを説ようそで稱ぶでも
るとこたまいびとかくる。男の多くなるとまれたゝ流くま
賜いその撰改千人ホも立猶ま。美女たまいび扨ゑイり。
窶ま果ても何処やゆ。原ー江風情のたゝゆ多こ微笑
と心ま親ていひとる人もたゝーうど。ゞまれ私ま金扶く
更ホ深ゝる察ゝおも太ケまいハ。果まて撫ふめホ。ホー
別六のこいりぞます。折ゝ来ゝて桃めども。月ま柳とるゞ

そのこ。磨ゝ乳ゑいもくさりいけり。ゞ夜表の戸をゝ開て。
入来るい例の別六何処の緒変の戸をゝ開て。
織木綿の大紋布を抱ま却て「ヤ物ゝゝさ。何のまゞこま
地裏ゝとおまーさ「ゝゝたんゝ不用ゑでも。二面のゝるハ
時ゝるゝも孫人紋布へいまさ沙と今の。重ゝこハ丁度又六
異国ア重ゝるゝさ賜さん。武手たゝゝ麦てゝ今一何指
しゝ君俺ホ初まゝんまのゝ子。俺たゞゞ別六さん。おゝ手張
ホ今がたゝ。たゝゝ。世ゝも亜ゝ真ナ。近ゝハ月の物も。

一向紙ーてお呉ぜあいうっ。お米と買ても出来ぬ。和りしい
ろ〻くっ蕪菁とお芋と。煮て食て居るこもたる。此振を
ゑっ十條へ来おいけっちゃア宜つこと。後晩ーても徐方がみ
いち。夫っらくも叔父さんの。ぼまと掃て拵っきとのが。矢張
吾倆どもの運命と。祝ぎしーちゃア居ッけまど。此分ち
やアモウ一年とも続うまいっと。苦労ふなって。疲れも乳
ぶ休まっまい。「オットっ〻ふまぜ。ぜっよお。別六が。金承知ッ夫
ぶっ。例いよ。自己も丁度稽古。おっも一人ふ
ぶっ。晃弟ふ沈揚豆腐ふ剥。甘美中ごと人まいふ
いサ。自己が。如何ふなっ世人ふっちゃア。ふ度の版いもっふ
ッチョ。まおい酒ぶ嬉へぶっ。牡丹餅ふっ。煎餅ふっ。落皮
羊羹鹿の子勝。上菓子ふっべ煉羊羹。今ふ玉粉也も
蒸羊羹饅頭。山吹紙の。皇。有条芋環。新雪。菓い
山吹の上。撰。夫ぶ。茶ふっ。鹿の丸でも。蒲の見ぜも
おっく沈。と。ぎっ。稼りぶっ。自己を。嬉って。稼ぶくと
いっちゃア。時宜。晩遍と。仕送りとふる。湯桶

我布を囲
ぐるぐる
割六
お腰を
挑む
かくま
おさま
がうち六

あしごア。先祖が何の根か知らぬ。月
小一度出して五拾人。十七八の美しい新造が囲いもとらア。
おかも隠れどいつこ乳あごるとりつくを。驚いて「アレおかハ。
発癲でも起るかすつこう。おかの義母さんが癇癪の持も。
居候しておかを並べて。接客のお祖父さんうち。訳
つて居る間地。全体ハ年ふ。勘定もする筈を。坐方も
ふるう。不足出り恢意やうぐう手紙い親類。丈ありで居る
けまどさて落命でこの赤個が。来て五人ばの先の田地と返

して きつても 作ハ出来ぬ。今まで 百姓で 作つて。その
代りこの母子が。ずつとして月小一度ハ 泊こんでうち
ても出て 来ることのやア 絶らまあつて。よく 家内で 居れ
せんそまいかおもつてるこぐが。新妻ようで 嬉しが見先
来ないこと云ておくと。お云おすることれか業ドたさんの田
地の工ハ私もよくつて居ます。と言派ハ接拶かー
ぢやアあいつまを行ご今ハ。成てヤレ新さが囲いまてるこれか
おこそいこ乳あごト云せも敢ぢ「コウハ聴さん。そうやア

かなのの引張ちげへざ。自己の方ちやァ女房ぶかする様り
ぞろ〳〵方振も云ふが。然も方けりやァ赤の他人一ぁち
横ぐるの頁でる。合力する縁り引張へとこ云ちやァ生処よ虎
ぐ五ん。お互ひ乳麻味ぁるコレサまァ此方と向様へ。何も左
振方面目ぁるつて。汁線を考ろつて義手ひ合ぁ和ぁ
百ぁ二百ぁるぞ。コレこの枕布と持てく様へ。誠だりでも
見えがたりァ。頭張一朱二歩判も。食雑ぁてぞ人やも。
如房ひ合ぁやァこまぞ。ぁるひ兵けで四ぐ気流ぁ

ぞやァ。ぁるぁ五。偽この法い密〳〵と。仕迷る人がなりし
て時目も見ぁりやァ。ぁる様房が。布ぁるも幕も食切ぁて二歩
やへ二歩で出来やァ。様へ。右方女へ今箱と。持て居ぁる
枕合が独。コレサ時方と向様へ。ト細袋ぁると御除て正
しも。ぁる兵衛が縁ぁる。どうせぁるとお判で。云ぁりて分ら
ぁへ。如ぞと思つてる麻ひ。左振甘くへ様ぁいヨウ
彩ぁるやァ。後方ぁるひ。麻屋さんへ云五て。義それで
もこりぞ。初様訴へでも。出る訴へ出てつけ

と笑ハせ。ポツ〳〵早くハ合ノト再び働き出て頬張りし一大きなかせ羽ご負こが見ゑ。ゆらゆらと居ようと傾ヨイヨイ〳〵

手ハ赤ち猿人を。逆てこハ赤〳〵ゐいヨ到一太猿とハ行のるゝ〳〵一行ごろかゝの肩ホポ赤。ホニ雲損も高〳〵ゝゝ

頭を振りて腹立ホ。せら笑ひて到六いゝ赤〳〵逆て

出て〳〵

春色淀の曙第二編巻之中終

春色淀の曙第二編巻之下

東都　松亭金水編次

第五回

赤ホ獣峰の下つき。尼法師の裏屋住。貝毎修行ホ出る。法師。或ひハ頼人坊ゝと唱へトウキリ〳〵くと人の門を立て渡世人を渡せの者もなる。その軒続きホ寡ゝし乳なる。母子の両個いとゝも貧ゝとなる。今ハ月も夜営の貧ゝ打線。る新の猪猟ゝと雪くと

空で煙草を吸つけ「サア」も仕舞て疲れた夫でもこの
ぐらいハ精出して。疲れ盛とも〳〵絶せず。大分〳〵ひがよつて来
さ更ふ出てもせずに。紬。お織でもなること宜が食ホ
物の絶法さめでたう。仮相うして和〳〵うめと。絶せる相
ありこいあご〳〵。然し。こ法を。もう久しく法を云つとれ
う〳〵毎晩一二段でも。後つて対線こもそが宜折角ゆ
といとて有つても。高〳〵ちや〳〵何ふもなく。色。光演も
師匠さんが。ヨウ考と考さ方が宜らう左相して礼でも

撫さるそう。近所のコ供が来ようと。お出ざけを出さ
ご十文。おんが形が大きくつても可哀と思ふ。夫より
性さアお金も入らずさうまろく最世えへおくと云
ていいくが更ても。おの。左相もろく乳まく今の内ざ。知り
てうるるアノ別宮が。隠まうるる。しい奴ざう。祖父さんの
教ずさ国地ずるて。半ラも取えしてと。長屋さんへ出さ
所が。長屋さんがこそかさうか。その頃へ負そも知つて
る。教かぜ別宮が不人情ぶ抜をとも。云理ざやうなんが。

行をいとふも到底が放蕩で不身人が活の上
と左様いふ人と獲害と云て云ふ所成
ふるさを移人候そとも到底が名をかくて居るえん
ぎ。きてとこやア拾方の移人訳いのものと世話ぎか。
活人ちまつてその金で母ゑが仕様ちうなら
わと京坂後ぶうせ方の按金ごと張込多義
さんいきあ様ごと活て貰つて五両と金八十まで
の代で十俵ゆ居るいるとふいるまで。支ぶ仕ても居賛

の紙の所とあへ来て見ても足りの足年支でも人
ふ恩いあへの紙さとたうい様の婚さんが世話として
対線やう洗濯あ絞ぶふたうう支で洗ぶ出
来るといへあ文七文年ふ。給ちあつてその足
まん。モウその金も活ふいふ。然一おつの正見さん。伸と
てるあまさ行様でも仕方のあらうと一寸先の闇と思
つて居ーて居るのサ支ぶうモシ名でも知人。お勝遥さん
ふたうと知ちあ。たうやア今行様でもあるヨ左様さ

行儀しとやか。お師匠さんもとかく大概一門に一人ぐらい。
あるものだからお容顔のやうなお器用なものが猶めづらしくて
中々叔母さんの御身にあらすれどおやア神妙ですはいそれ
よりか精出して針線の仕込をする方が当世で所帯には
ましでいゝ「そりやア何とも言ますべいがいるとは居ますけれど
きりましし師匠でも格別な世話アお手がら様でも出来
て居るやうなものと思ふのサ。ホンニ人は七ツ時から八ツ時とかいふが違ひ
ない。世が世ならば今頃は立派な家のお嫁さんで家の

しかるに鈍拙な見ごとに云て居る所だッらがサア一ツの事を違
へば浅ひ奴のよも快く為し遂ぬ事をしなるといふ事が憂き
世ごゝろは兼ねて見えても実に自由にならないものサ。「そりやア天理
深な所のお嫁御さア。そりやア行儀は頭でござりません「する
ますとぶ左様ならぬ云さのもやア初めよりは若い。その頭ハノ
箇様して以来のことに婚礼の儀式までもしてあげ
話し「ええ手前の家も容顔どもが十条へ、ひと門や竜むお主人
に且那がむかつてその松五郎といふ人。男の児が跡を取り

て。居ぐらくしこそつて。所がら先頃風の後ぐまけべれ
みる年をば何処へか失て。伴沢の殿八と門ふさんのお懐と
いのぐ支掃ふかつて。跡を取くくり殿八。宜具羽の
風をして。毎日毎晩茶屋ふる。お懐さんい大嫌ぐ。
ときもまこと嘆くく仕て。良人よ貧ぐ大後ぎ。こくる人へ
毎ふ死を望。女の癖ふ媚妓ふ。夜具と考くく新妓
出し。今と湯ふ出るのも殿八へ面倒ごとサ。毛知ぐ
設八も。生活ふかつて。十月も二十月も宅へ帰ぐ。廓

の表い様るのふして。媚妓買ふつく者もなく。近所へ遊び
処を掘へく。手処へ入浸るもあもあく。お阪焚やおこどん
まぐ。支くふ牙様へして。外持を掘へくといんぐく。内へ
モウ乳房で大くく今ふ戸をぐらく。支くふが大ふ
ふ血脈の男の児をば逐出し。且羽の生る時ふく。伴
沢と私通して。家を押沢くく罰ぐ。乞食ふあくぐ貧ぐ
覚め人と。嘆くと笑くも去年の上。今いまこと仕拵ふつく
ぐ。ヒヤ去拵ふ始末ぐく。ぐうせ新婦ふもあられぬ。

ぢん八
孫汁成就
して
段八不義の
冥黄ゆ
滑る

漢見ちらとバ手紙の家の。彩婦と抵つとむかの一角の上。
ホンニ手紙後ホ義七さんうう。紙しと手物がとふ なるトよ筆
筍のうう出ーうう。把出して手紙へ廣げ「コレうんかこのホさひ
雲の跡見がかかの聟と抵と。松み弟のよ形ごとサ。彩
ひよ宝ホ物いみても。肝心の雲人さん。手紙ー居みの抵
ごうう。ヤアとれも反扱ひちう。ちし何彩ホ行振して居うう。
雲後ゴ案しホ母親ハお麻しうふ嘉ごッうぶ。手紙へう紙
ううとおもヨ「まく支ちやア婚祝まぐしと。人がなうんぐ

ぐぐハまんう「左指サこの玄対面ーー手見おやア知とそ
の人をごううしと尋松て世路来ごと。切おいうと結しと
ら。世ーとア商談財ホふも。ありさうかんでぐぐハまんる
へ「そうやア先が人並の。暮しぐもして居うやア。何振で
もあらうゲまアざろと。十一二年の遠のと。何ごう狭いと
ううやア ちふい。悲しまと何指ハ又ア。ホ立まいあ
ぐもふハうう。あうやア かふ獲ハ入まて大事ホして
仕舞て並ナ「ハイ支ちうう。左指しませうトハ扶さも

笑ゆゑ殘りまヤ憎つて居らるちふ。八ツが嘆くサアくお
仕舞。もと娶れられたるあトとそまうう手紙を行づけて。
母あハ眠つふ。紙ふけり。郎流られ世の稼ぐ。松の夢
ハ春の母。お廢ず緣ふて江戸屋へゆ。年月と過をれど
ふ。今年ハちや十八歳。その人品いさゝふも云ひ。色白く
し腹清く。何如へ出しても恥ずまいとひて二ツ下ら
ぬ。容体のこう利發あて。幼稚られさ人勝ち惡ハ上品
出と惡せふ。書迹算盤繼書うう。進藝まで。も武
士陸ひ。上達せずとハ人ふ。愛ゆ於て勝ち惡ハ。
ちやほ十をさ人こうほッ紙て。子とふ出のあぐ。ひし赤
出ふを世ゆやあゝぬ性の和ぎる弱羽と。黄ひて者
ふ。ちうもの松の弟を子とおせび。ふ紙ふ
ちハあゝと。祝歌かンぐと呼集め大ふと高浅整ひ
て。依この母子小ハ笑を。お麻ハ天へも昇る心地よ頼
ぶと大ふとあゝで。彼ふ一ども松の弟ハ。緣ひ上て
の年来。大恩を更ふる人身の僥倖と思ハの小。今よ

つと愛の子ともなりて。世間の人の名つくも。何ところあるん
芝を来ふし。それより八家来門ぢ。廊を勅使在のゞ相愛。
見しだるうへ。辞退さる。豊下ふ猪名寺つい支配人ちゞあ
先生管。まこと麻ども一間ふ呼び。松の平と岩ロの一
條。今ひとちしふかゞで。お麻ゞと人来る時ふ。二家屋
ふ義七ゞ子ちゝ愛て。他ふゞ名ふまり。その仕細
ハ今より代。祖父さゝ多いこの浦ぢゞ八大通とつそれ
と海ふ身。何万両の浪つゝ。岩ひ果て江戸屋の
家名も。脱ふ退ぢ所と。ふ義七が祖父のふ名つ。
浦ふふさい茅剣の江戸屋ゞ退ぢ乳の毒ちり。今浪づ
ぐこ五ゞ方ちゝと。二万ゞ今と入ま。祖父さゝ八隠居
さ。雑ひ茅事張切ふ。世居して異て。今ま続
七との家産ふ。ちつも。ふちつゞのお茅そとゝ牧乳
ひちふ。と訴ゞふ義七の親父といハ放蕩身。自ゞ
為ふハ祖父さゝの。如房と私色と一件で。怒地ま中遠
ひ。ふ伝不通ふ。ゞさとハ親父の勘しで。ゞて屋。ち

拙くまたべこの児の為ふかい。祖父はなるる子孫つ
どの。為ぶ為こけこの家筋。仕ぶこの児ふ潰されらて。
浮ぶのことと考へべ申候。子もおいるの為ぶ出ふ
家と壊まべ申ちつどのへ。為ぶしをする自己が本意。
猶も白浦もおい拙の弟と思つたの遠ぶ。一緒まこ云
て性をと。以ふ支配人老せ骨も方拾ふ修ちふ報
のと。拙の弟さ女四姉退と。なるふたの且ぶさ家の門実
云ふも悔ふつけ。作の為ふ為ふ。動めふ

拙の弟も。訴訟と申て然もあしべと。ちまつふ蒙子の
初めと為ても更へ一番一門出入の為ふ
為且弱ふくと。殺す且ど初め弟へ。呼ぶふ
ふて一安年と過しけり

第六回

蓁ふ見ふ。ふちふ。風業ふ為て而とふし。ふと律
ても天地のふ。況ても人ち性ぶ方もすふ
臭ふ。弟を人嗤殺を威勢ふ。ふ殺の様ふ。

一日狂へば天地も利ぐ。霜もお麻
八月末より。さぞ病ひもなかりしが。不審血の長感四月
うと。細世一ぶつ病ひより。猶中すりて。この縁に拠もなく
ぬ。大病ふ。初め弟へ。おぐろ乱憂へ。日頃の看病ぶ。
猶お書つも続しふ。医師に加持祈禱。よの
なくしふ世治をふし。この家ふ使つて。侍女舞女の
書くまで。常ふ麻が用をうけて。加つて民憐べ。ふ此
以猶ふ。こそうと笑て。見ぬもまこと。頃ぐりよ。初め

が手を助け。食伝物を弓手を。新藤門郎。お麻が
父ハ。先頃病ひより。稀世。妹のお茂も相愛の新なり
て縁付しぶ。落命ふて。長人ふ別是。この以家ふ久なて。
親のお為と表個の著しも。お麻ぐ分より病ひやうぐ。
大病と笑て。是も来て。稀くと心を寄せ。なる夜迄
も快きふや。お麻ハ拠と接げて。ふ年ハ世べ拠よて。初
あ弟が居ると。ハて。ヨヤ。旦那。まぐお在ら。今夜ハ大
分心持る。笠ゆうぐどざいます。世治てお想こ。あさ

い物とお花も居まんかう。そ張ふ用ハありません。表出
たらこ子とといふあいそで出ると。若しの給れ
ふ足腰を。按こ摩つてお貰ひまうし。則がたうハ
ありがとう。後でハ勿体ない。必ひまん「何ごまこ嫁まろ」
ヨ。そ張おかとと乳ふ去ふいで。早く快くなるやうふ。
娘今ろと人であらうとも。おの腹うう出てえっまやと思
物ふ遠ひあい。丈と麻畠ふ。日ふやァ。吾倣の裏剣
が怖しい。足腰いかろう浸いいあ。取扱ひでも厭やァ。色の
「ホ三」お年ハ弱ましけまと。縁よく。お乳づく。丈ふ
も強実の。お心ふ深いうう。サ。何年早く快なって。
ふ美且ふ。お姫ひさんをお要ふすって。孫の新でもえ
ますつやァ。お麻も強よ大。僥倖でとの上ハどざいません
「お姫ひさんとり人ハ美且ふハよく。見えちやァお花ふさ
うまの。七案の時ふ約束して。仮ふ義まで去すろとも。
丈でも見えて入ッ去ふやうアどこ見て
りうと。世ニこァ見えがあろうやうど。そ時ふハ幼稚心ふ何

ぐろ和うーいやうふりつこのと。今ふ元をれへやうご〈その
樣屋も手後ふ且那い亡ちう後家さんのお照さんと
いんのい賢い人で。且那が種くふ幸すつけをと。頓くふ知れ
まやをんのと。二番屋の内富さんい。側の嫉妬お照さん
ふ。ちまどのことと紅作くく。お照さんハ猫を元て。此方の
且那がお亡ちう。おすつこ情ふ傳つも。丈うちゃバ王子
の方へ引籠おすつこと人の噂。今ぢゃア彼お死さんも。
実ふ元て大きく かありぐくうが。何程ちくく お位でう。

行ふ行末がしてあつても。らのの宅の若且那ふ。お死かすり
もやゝ彼お児と。笑うくふもちうまんまうろへべホニ
世間い種ふ。ふ移り更う。実ふ考て堅めこるハちハト
普訪しも病ふい伽。初ふ弟ハ此されふ。孫て元色如
くちうしもゝ出て作くく。家しきん地もせくれけ
つ。祐もお麻ハ月ふ傷て。病ハ手ちと今ハ大や。薬の効験
もつええ元て。元ふ空くくちうけとべ。初ふ弟ハうふも
さくちう。お若お茂ゞ敬ハいまあう。傷ちまつも悲傷色。

伸べて送り来のとつと叮嚀に吊ひて七七の忌もとしけとど。初め年は壮賀者心強くあるとべ日数も絶へも殺さぬ呪こるさ人なるとべ看病のこ新の忌数をたゝで。元気も劣つて又ゝえけとべ。待ちつはとまと薬しで行うはゝる慰めと。勧めまどそまもせそ。初て病ひを曳出さんと。ゐひ苦しゝる折ゝに彩茅馬楽ゞ持揺きゝ「且羽モミ」れは。行孔へも久ゝお供をとません世行は紅葉の葵で。濃の川へ人ゞ出まん。近き新屋の六角院ゞ大ゝ流行と中まんゞ行と一日お備ー。ちうまちやゝ行指でゞゐまて。連中の抑枝や延ゐもお昏でゝ居まゝ「左指サ紅葉は宜ゝ。ゝまて不揺摩」。ゝ新る坂。巣時へみて送つて来ゞ。大分出来ゝゝ彩ゞ。ゝ巳自己ゝやゝ初め年めゞ。意毎ゝ行ゝて。毎日寒いでゝゝ居ゝ。気にゝて行ゝ孤へのヨ。自己と一所ゞやゝ可笑あゝ。おゝ世行孔へでも。引張出ゝ異移ゝ。今体大入ゝ。行指も指孤紅葉ゞゝ

「いつそまアそりやア切ないの且那ののお許しがあつて。出来ないそりやア
実ぶりして。放蕩にするのハ悪いぞ「ア然し浮気を戒る。
放蕩するのもすりやア中で。止てア味も知られ人だやア実
に偏屈で話せる者へ。何方か連て行て見る「イヤさ
宜敷父爺さまだ。否承知でも手ぬる親父ど。五六遍い
あめでたくしく暮そう「イヤモウお時刻の九ツ半と。早や翌朝が
遅くなると勝手して帰りゆく○翌の朝媚けた者ら寺汁
新年に寒い風邪若い者。おでん熱酒で居ずゝ蕎

饂飩ふ温めで甘酒と呼で售歩行。此方の軒の人さ
ウリ髪鮮明なり門づけハ風吹なりの手拭ま。冠つて家
いよ〳〵見え稀ど。年ハ十六七なるべく。器量ひしと婦ハつと嫌気
帯ふさきまで雲も何を。今ふも東の風さうなる。モウ
よろけ声と心も急くまゝど。三弦の胴秋なり。座敷よ引つ
こ抱へて下話の言を。門さて。東の北鄙の下通りて。つまらんど
とうハなの表ハ垢染て一條路来たる所へ向ふより二三
個の破屋ハ。ほかくと寄りて「コウ姉女さん。ちよと寄らねへ

ん
ぬがなるァ。外でも奴人間色ッちゃァ買て往家て交ホー
ごァ。翌の晩まで蔵つて居ッ。金貸ッく蔵ひ度トいまれ
て悔ッと云ふ泣き「お安イ出用とまりしてごァ。今夜ハ
障で寝ろホー。宅ぢハ母の長坊ハ。私ガ彩して唯ても。
おて呑ッと蔵して。翌のお米も蔵ふ。ごッと。ハ
行年情悪しト孫を湯りて往んッもると。破ッ落ら
神をとらッへ「コレサ神まるとい。ひッとホーヨ。えりて。おホ
待むのご。ホ出ッやァ夏でよー。稼ごと云ても止ホやァ

ホ孫へ「アレサ夏でもこの孔方ハ「貸されごァ」で蔵ット
いひさ女蔵の間へ手と入ッと。出ッと。きッじと。ッ入郷合。
挿ハ。ぬつきり胴さ人も。崩ッく。法用まる変女。その名
ホ孫を掻攫ひ。跡をもえびして。ッもあく。変女ッ破
裂ー。法と。拾ひなつあて。紙を紀ー。物さ入ッで。紙くも
乃理。ッ紙へ来かる一個の雄士。ッあ。ぬう後ホ。
雪の方と顧て「コウッる。楽可壱。ッホ。今の二歩も呉
て。ッ。ある。極ッ掻奴もあるんごナ。破拾ホ奴を見

初五郎
そらくも
あるく
みち
途よ
おい花の
雅
おそか
そらく

初五郎

る此豆腐の中へ突き出て来た人が。先へ三個此方へ。ヤツトウ
もあるまで拳術はあるまいぞ。都て此方が豆腐の中へ打出
まつりくりゃ出しは出来ぬ人。サア是を出て来な。何処に居る
ふト紙入より捻つて出して合包こつそり楽は錆より短銃
て「愛女さん梶ご目に逢さ。何れも怪我をあそばし
ねへかとつやア且那がおあの雑箸を。気の毒がつて灘でぐ。
此方度と致仰から黄つて早く宅へ往ナ。宅はこの近所か
エ。そこ其まで此方に糸揉が。胯がつていつア紙へよく金入れ

なせエ女「ハイ左様なら御縁ならきなら。存じませんが御深切な有
がとうござります。併あなたも是迄の御方
さまに此様な御金を頂きましては私の気も済ませぬ。其
して貴方にも叱られませんから。若しお母さんは強てモウ頂きますと
と聞く子兒は行年の方へお仕舞なすつて下さ
いましト押久せべまく手に載て「イヤ堅いことを云ふ
ぞ。都てすでかつては。お志で有難い義つて逝ぎなヨ。十三
悪郎が叱るまいのに。サア貞も達も手前が遠まる。早く取

ホト強ミジル。愛ハ如何ニモ不もとゝ〻ばりて。頻ニ系揮退
さるゝもの不。此本ハ大やとす限ル。第二編の路めよ第。
安〻く結尭と強ル人ゝ

春色淀迺曙第二編巻之下終